

## Back の攻防における equal condition 原理

ボールを獲得して攻撃する側と、捕まえて止めようとする側とは equal condition からスタートすることが競技の原理です。

ボールを取り合うスクラムを例にとって言うと、双方にボールを獲得する平等の機会があるのです。

注釈：現在スクラムは押し合であり、且つボールは投入する側か取るものという感覚で行われ、投入者の立つ位置・投入地点・投入ボールへかかるひねりなどルール通り、正しく投入されているとは言えない。レフリーもゲームの流れの中で否定しないで進めている。equal condition というラグビーの精神は過去のものになってしまっている

FW がボールを取り合っている間、双方の BK はアドバンテージライン（ゲインライン）に対象的に深い位置（角度）にラインを敷いてボールを待つことが当然且つ適当であると考えられていた。

一方がボールを獲得しバックスラインとして前進し始めると相手側も防御に前進するのですが、（その間に攻撃側はダッシュカを増し、間隔や走る方向の変化を加え、防御側はそれに対応しつつ）アドバンテージラインに対して対象的であるように前へ出ました。重要なことはボールを持ってアドバンテージラインを越されないことであった。双方深い位置からジリジリと接近し接触するのが望ましい状態と考えられました（図1 参照）。

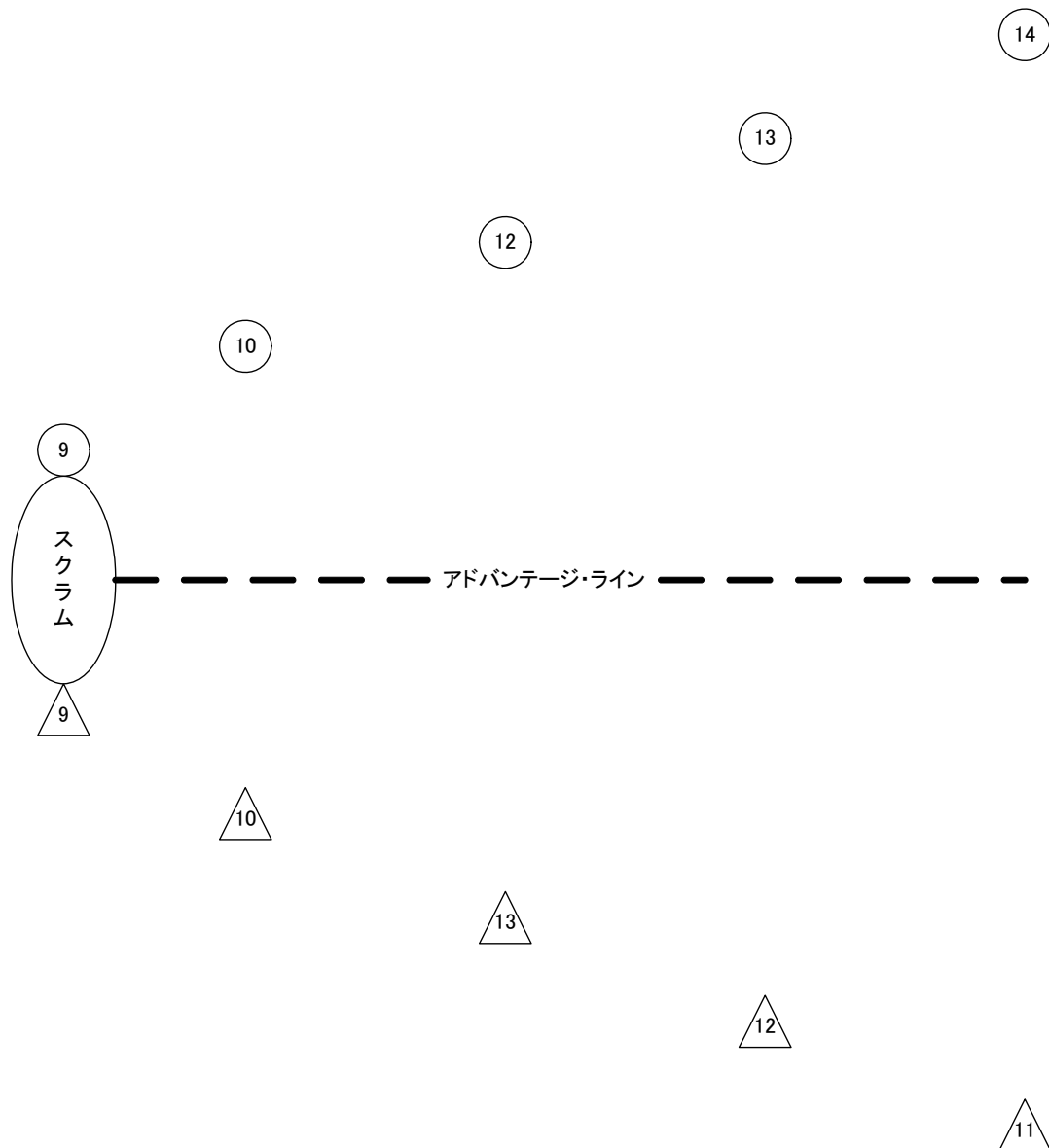


図1

相手側がボールを獲得した時または獲得されそうになった時、準備的に少し前進して浅い位置（角度）から急ぎ前進して（アドバンテージラインの対象的でない）アドバンテージラインより前の位置で相手を捕まえ止めることが有利な場合がある（攻撃ラインに対応しきれないリスクはあるが）という考えも芽生え採用されるようになりました。そして、少しでも前で捕まえた方がイニシャチブをとれるという考えが強くなりました。直近のハーフが攻撃の芽を摘むことが奨励される傾向も出てきました。（図2 参照）

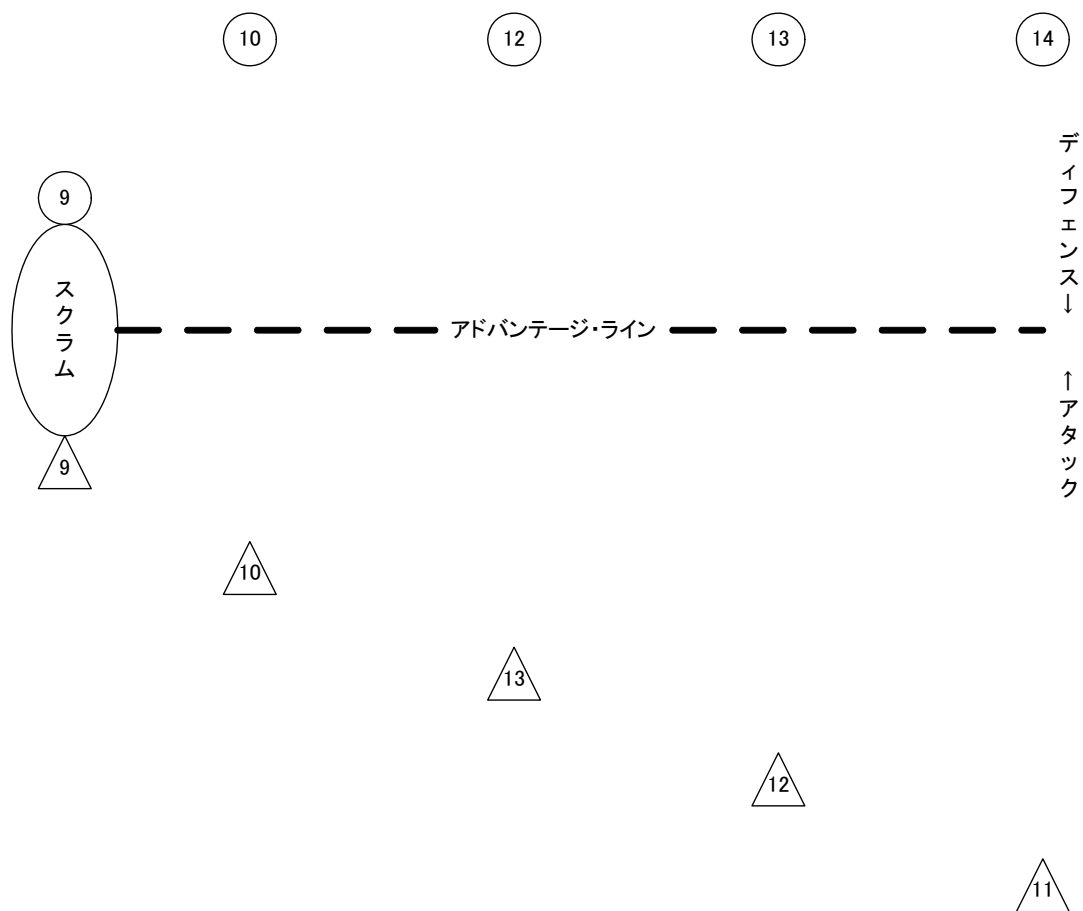


図2

フラット・平らな位置というのは、本来攻撃側が真横のパス（スローフォワードでない）を、最も前の位置でボールを受け取る場合であって、アドバンテージラインを越えることを目論んだものです。

防御ラインがフラットであることは、捕まえる目標に向かって短い距離を突進するものですから図 3、攻撃側の変化に対応しにくい欠点があると考えていました。しかし、少しでも前から相手を捕まえるという目的から効果的と肯定されるようになりました。スピーディーであることはきちがえられている嫌いがあり、ボックスの攻防のうまみ（面白さ）がありません。技巧に劣るぶつかりあいだけに強いだけのプレイヤーが高く評価されるという情け無い結果になってしまっているのです。

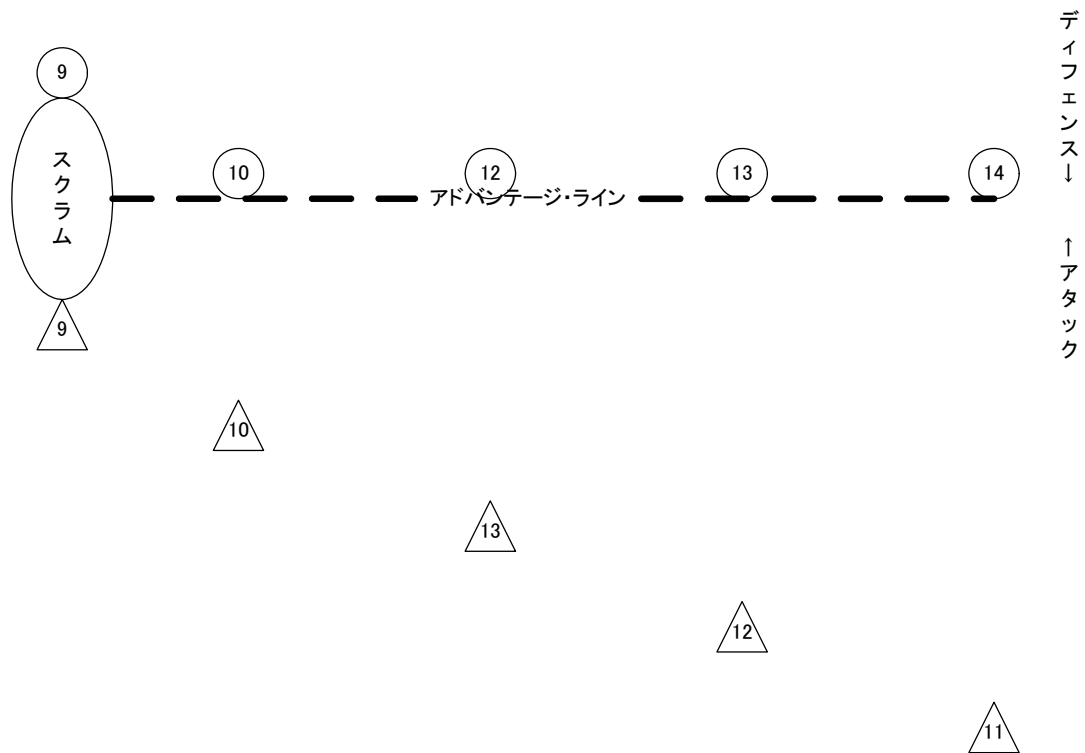


図 3

スクラムでボールを獲得しても、スクラムハーフを始め防御側の餌食になって後退を余儀なくされる不合理性と面白さを改善するため、スクラムの最後尾のラインをオフサイドラインとルール改正されましたが、オープン展開を志向するゲームの目的は十分達することが出来ませんでした。ELVs (図4) でさらに5m 後ろからということに改正されましたが、ラグビーの精神を生かし方、即ちラグビーの楽しみ方を理解する事がなければルールが生きてこないでしょう。

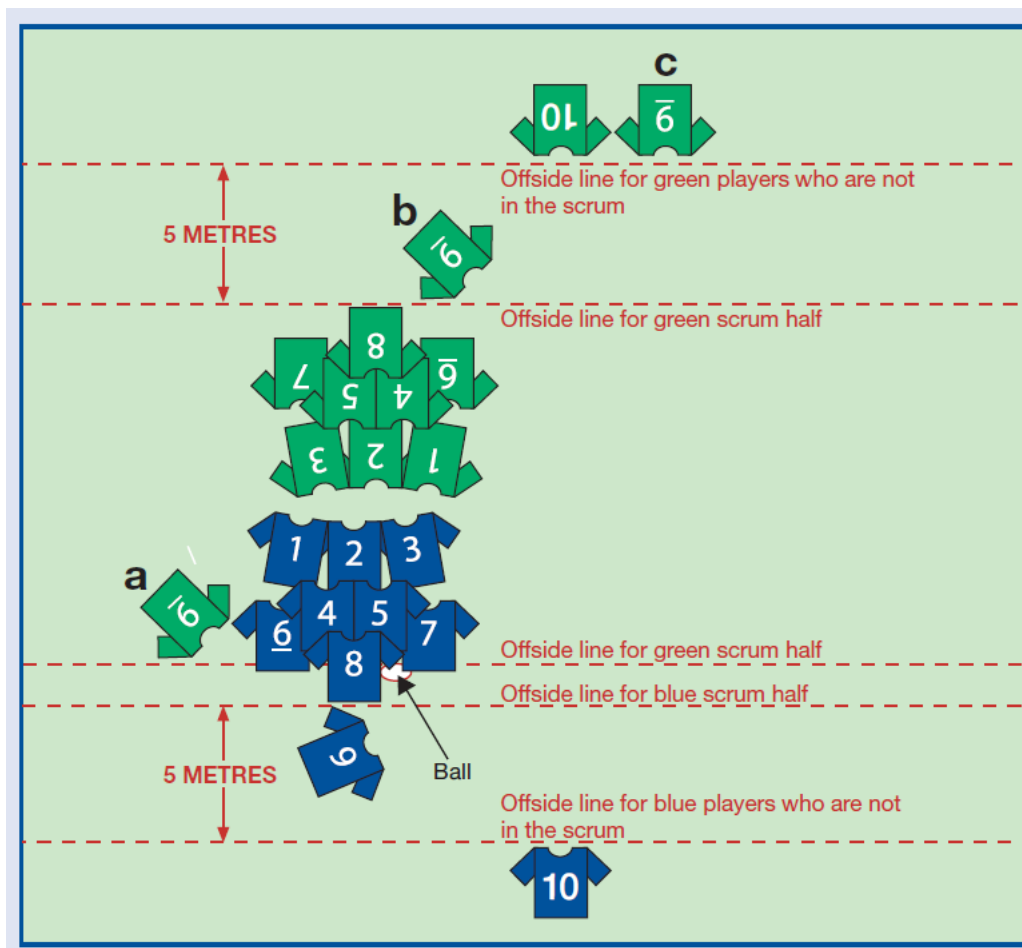


図4 ([http://www.irb.com/mm/document/NewsMedia/0/080711IRBELVGuideEN\\_5897.pdf](http://www.irb.com/mm/document/NewsMedia/0/080711IRBELVGuideEN_5897.pdf) 転用)

2008. 12. 06  
西川 義行